

## ミシガンより思うこと

University of Michigan Rogel Cancer Center

奥山 紘平

(東京医科歯科大学大学院  
医歯学総合研究科顎口腔腫瘍外科学分野)

本原稿をしたためている現在、渡米して1年9ヵ月が経とうというところだ。アメリカではおおよそ世界に先駆けて新型コロナウイルスの蔓延が終息し、それまでの日常を取り戻している。アメリカ政府主導の徹底的なワクチン接種は確かに功を奏したであろうが、実際はいまだに下火が維持されたままであり、今後も継続的な集団免疫の獲得が望まれるが、インフルエンザのように終わりはきっと見えないであろう。私はまさにコロナ禍の最中に渡米してきた。羽田空港からシアトルを経てデトロイトに入ったが、がらんとした羽田空港とは180度異なり、シアトル国際空港は人で溢れていた。逆に、乗り継ぎのデトロイトまでの国内線は満席。マスクもしない体格の良いアメリカ人と機内で密になり、到着後に生活のセットアップを控えていた自分にとって、ただただ不安であったのを今となっては懐かしく思う。

現在の職場内の環境はというと、いまだに一部の事務部は入場制限をかけていたり、いくつかの講習等はZOOMで実施されている。これはコロナ対策というよりは、担当者の数が少ないためとも思われる。一方、このようなオンラインでのコミュニケーションは移動労力・時間の節約等、有用である部分も多く、アメリカにおいても労働者の働き方に変化が見られるようだ。

運が良かったことに研究体制は渡米当時にはすでに平常運転に戻っていた。現在は、頭頸部癌におけるインフラマゾームが腫瘍免疫に及ぼす影響の解明が主たるプロジェクトであり、いくつか有力なデータが得られているものの、ストーリーを完結するには至らず、手探り状態が続いている。そんな中、マウスのジェノタイピングや腫瘍モデルの作成などを行いながら、空いた時間を利用していくつかReview articleを執筆することができた。充実した研究環境に感謝しながら、全力で研究に対峙できる今を楽しもうと思う。